西野田遺跡（第６次）発掘調査報告

２０２２（令和４）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

１．本書は、令和２年度に実施した畜産研究所施設整備事業に伴う西野田遺跡の工事立会による埋蔵文化財発掘調査報告書である。

２．工事立会調査地は、三重県松阪市嬉野中川町字西野田に所在する。

３．工事立会調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。現地調査から報告書作成に至る経費は、三重県教育委員会が文化庁からの国庫補助金を得て一部を負担し、その他を三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した。

４．工事立会調査の体制は次のとおりである。

工事立会調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査研究１課　主幹 中川 明　主任 元座範子

工事立会調査期間　令和２年４月６日～10日

工事立会調査面積　115㎡

５．現地調査は、畜産研究所の協力を得て実施した。図面作成及び写真撮影は工事立会調査担当者により、遺物写真撮影は当センター 主査 森川常厚による。

６．本書の執筆は中川及び森川が行い、編集は森川が行った。

７．本書の遺跡地形図で使用した図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている（令和３年４月５日三総合地第１号）。調査区位置図に使用した事業計画図は三重県農林水産部の提供による。

８．本書で用いた座標は世界測地系で、方位は第Ⅵ座標系による座標北である。標高は、東京湾平均海水面を基準とした。

９．土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に拠った。

10．調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

目　　次

Ⅰ．前言 ……（中川　明）… 1

１．調査に至る経緯 …… 1

２．既往の調査 …… 1

３．調査の経過 …… 1

４．文化財保護法に関する諸手続き …… 1

Ⅱ．位置と環境 ……（中川　明）… 2

Ⅲ．遺構 ……（中川　明・森川常厚）… 7

Ⅳ．遺物 ……（森川常厚）… 9

１．土師器 …… 9

２．須恵器 …… 9

Ⅴ．結語 ……（森川常厚）… １０

１．遺構の時期 …… 10

２．嬉野廃寺との関係 …… 10

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 5
第３図　調査区位置図 …… 6
第４図　調査区平面図 …… 7
第５図　調査区土層断面図 …… 7
第６図　ＳＨ２実測図 …… 8
第７図　出土遺物 …… 9

写　真　図　版

写真図版１ …… 調査前風景
…… 調査区から嬉野廃寺を望む
写真図版２ …… 調査区全景
…… ＳＫ４・ＳＫ５
写真図版３ …… ＳＨ２
…… ＳＨ２
写真図版４ …… 出土遺物

表　目　次

第１表　遺物観察表 …… 9

Ⅰ．前　言

１．調査に至る経緯

本書は三重県農林水産部担い手支援課が実施する、畜産研究所の施設整備事業に伴う発掘調査である。近年、研究所内の飼育家畜に対する獣害が顕著になっており、研究所が担う諸事業の推進に大きな妨げとなっている。この対策として、所内各施設や通路に防護柵や除菌設備を増設しており、令和２年度も昨年度に継続して工事を行い、獣害を少しでも軽減することを目的としている。

令和元年度末に事業部局及び松阪農林事務所担当者との協議を行った結果、工事により滅失する部分は遺跡対象範囲に該当することが明らかになった。

これを受けて、令和２年度に工事立会を三重県埋蔵文化財センターが担当し、実施することになった。

２．既往の調査

これまでに西野田遺跡では５回の発掘調査が実施されている。また、この他にも200ヶ所に及ぶ確認調査や工事立会が実施されている。

第１次調査　平成17年６月から９月に実施された発掘調査で、３地区2,693㎡が調査されている。奈良時代の竪穴住居や中世以降の掘立柱建物を検出している。

第２次調査　平成18年６月から11月に実施された発掘調査で、1,755㎡が調査されている。飛鳥から奈良時代の竪穴住居のほか、土師器焼成坑等が検出されている。

第３次調査　平成19年５月から９月に実施された発掘調査で、4,150㎡が調査されている。大型竪穴住居、布掘りを伴う掘立柱建物等が検出されている。

第４次調査　平成19年４月から９月まで断続的に1,936㎡が松阪市教育委員会により発掘調査されている。奈良時代の掘立柱建物や竪穴住居等が検出されている。

第５次調査　平成21年５月から７月に750㎡が発掘調査されている。奈良時代の井戸等が検出されている。

３．調査の経過

今回の対象地は、県道から研究所への出入り口を新設する範囲で、低位の県道へ向けて掘削される部分である。調査範囲の表土は重機で、遺構面は人力による掘削を行った。以下に調査日誌（抄）を記す。

調査日誌（抄）

令和２（2020）年

４月６日　重機による表土掘削終了。
調査グリッド設定、基準ピン（座標取付済）確認。表土下50㎝地点で地山（褐色粘質土）を確認。西側から人力による遺構検出開始。

４月７～９日　遺構検出および掘削。ピットと土坑、竪穴建物を確認。壁周溝を検出。平面図、土層断面図作成。レベル計測実施。全景写真、個別遺構写真撮影。

４月10日　土層確認後、現場資機材撤収。

４．文化財保護法に関する諸手続き

今回の調査にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等にかかる法的措置は、以下のとおりである。

（１）県文化財保護条例第48条第１項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知

令和元年11月28日付け　畜研 第38号

（２）県文化財保護法条例第48条第２項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」

県知事あて県教育委員会教育長通知

令和元年12月３日付　教委第12－4154号

（３）文化財保護法第100条第２項

「埋蔵文化財の発見・認定通知」

（松阪警察署長あて三重県教育委員会教育長通知）

令和２年５月18日付け 教委第12－4406号

（中川）

Ⅱ．位置と環境

松阪市嬉野中川町に所在する西野田遺跡（１）は、松阪市の北東部に位置し、紀伊山地から布引山系を源とした多くの川が形成されている。そのうちの主要河川である中村川は、上流域や中流域の田園を潤しつつ流路を北へ変え、多数の支流と合流し、雲出川へ流れ込んだ後、伊勢湾に注いでいる。

当遺跡全体は、町内を流れる中村川右岸の段丘面が東に張り出した平坦部に広がり、主に現在は畑地や畜産研究所の施設等で利用されている。

以下、各時代の主要遺跡を概観する。

縄文時代　中村川の中流域に所在する遺跡について概観する。草創期については既調査の遺跡は確認されていない。早期になると井ノ廣遺跡（２）・東野Ｂ遺跡（３）・釜生田遺跡（４）・針箱遺跡（５）が調査されている。井ノ廣遺跡では竪穴住居状の遺構も確認され[①]ており、針箱遺跡では早期前半の黄島式土器が出土[②]している。この様に中村川中流域では、この時期の遺跡が密集する傾向がみられる。

中期では堀之内遺跡（６）や針箱遺跡があり、後期になると膨大な土器や土偶等が出土し、配石遺構群を検出した[③]史跡天白遺跡（７）が著名である。晩期では蛇亀橋遺跡（８）の合口土器棺墓[④]が知られている。

弥生時代　代表的な遺跡には、水田跡が検出された[⑤]筋違遺跡（９）がある。ここでは前期の畑も確認され、生業と社会の様相を表している。また、下之庄東方遺跡（10）では中期から後期の竪穴住居と方形周溝墓が見つかっている[⑥]。また、小谷赤坂遺跡（11）や隣接する清水谷遺跡（12）でも後期の竪穴住居が多数確認されている[⑦]。

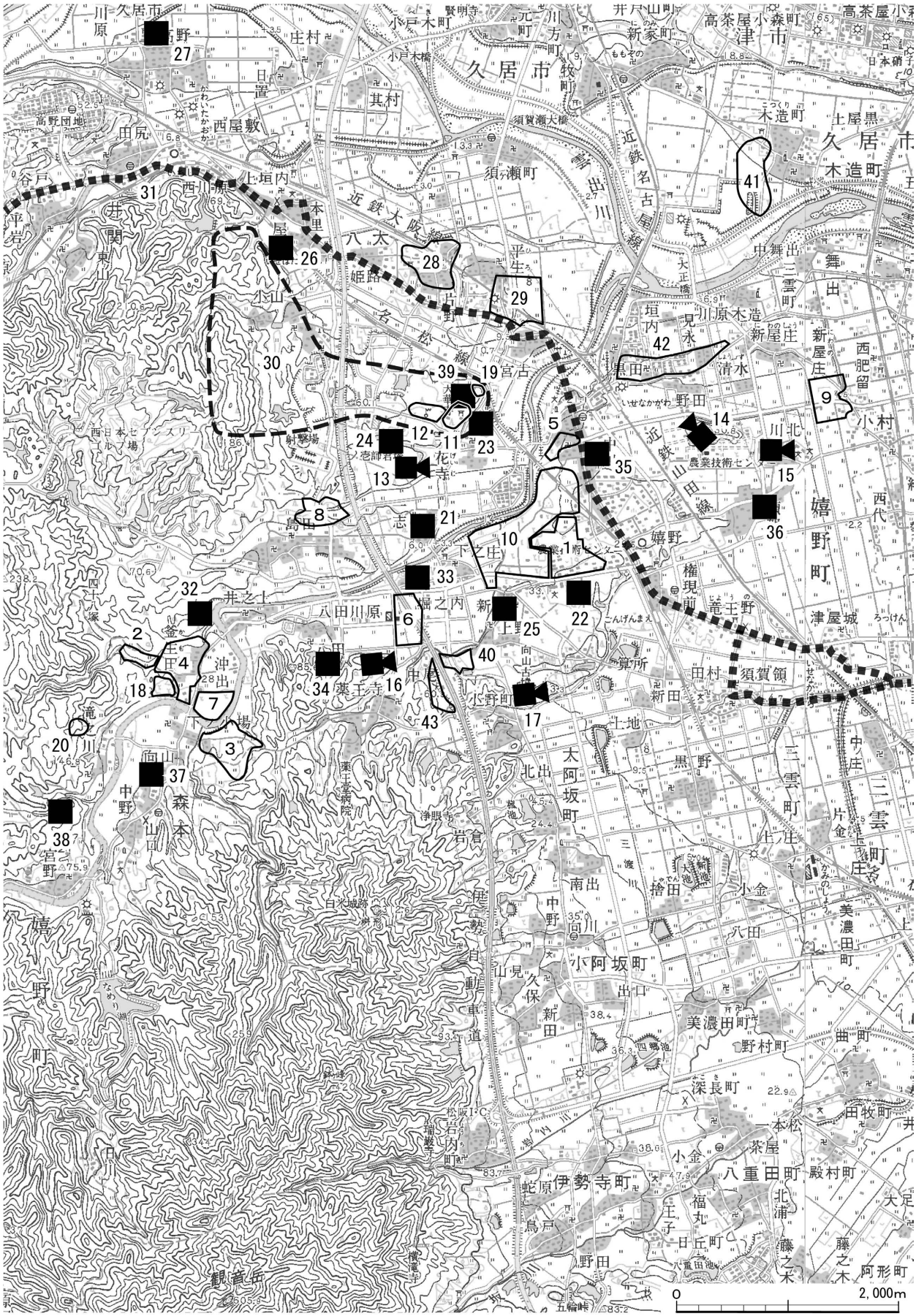
古墳時代　当代になると中村川流域には多数の古墳が造立される。前期前方後方墳で注目される筒野１号古墳（13）からは、三角縁神獣鏡が２面出土している[⑧]。また、西山古墳（14）、庵ノ門古墳（15）、錆山古墳（16）、向山古墳（17）も地域の有力者の墓であることが明白である。

古代　古代の生産遺跡としては、寺院の建立にあたり、瓦窯が造られていく。釜生田辻垣内瓦窯跡群（18）から出土した２個体の鴟尾が注目され、他に川原寺式の軒丸瓦が出土している[⑨]。この他、天花寺瓦窯（19）や須恵器窯の上尾戸窯(20)等が知られる。近隣には一志廃寺（21）や嬉野廃寺（22）、天花寺廃寺（23）、中谷廃寺（24）、上野廃寺（25）があり、旧一志郡内では班光跡（26）、浄泉寺跡（27）等が加わり、古代寺院が密集する特異な地域となっている。また、片野遺跡（28）や平生遺跡（29）からは、暗文を施した精緻な土師器の杯皿類が多く出土しており[⑩]、寺院の造立と合わせて都文化の伝播の一端がうかがえる事例である。この要因としては、大和の都と伊勢湾や神宮を連絡する道が当地域を貫通していたものとされ、万葉集に登場する「波多横山」を天花寺丘陵以西（30）に比定する説もある[⑪]。この道は、平安時代にはいっても退化時の斎王群行路として利用され、近世には初瀬街道（31）として神宮へ向かう要路であった。

平安時代では、下之庄東方遺跡で掘立柱建物が16棟も確認され、石帯や円面硯が出土している[⑫]。階級相当の有識者が存在したことが窺えるほか、建物配置についても検討を要する事例で、古代の有力者の一端を垣間見ることができる。また、中村川左岸の平生遺跡でも平安時代後期に下るが、掘立柱建物が柵列に囲まれ、空堀を伴う可能性もある[⑬]。有力豪族の居館相当の可能性があることが判明している。

なお、10世紀前葉頃に成立した『倭名類聚抄』には、壱志郡内の郷として「八田・日置・島抜・民太・神戸・須可・小川・呉部・宕野・余戸」の文字が記述されている。このうち西野田遺跡は「須賀郷」に含まれると考えられる。

中世　本遺跡周辺の中世は、城館が多数築かれている点が注目できる。なかでも中村川流域には多く存在し、近隣から釜生田城（32）、堀ノ内城（33）、八田城（34）、小川城（35）、須賀城（36）、森本城（37）、滝之川城（38）、天花寺城（39）が挙げられる。小川城跡では大規模な区画溝に囲まれた屋敷地が発掘調査において確認されている[⑭]。須賀城は大規模な土塁が築かれ、現在でもそれを確認することが



第１図　遺跡位置図（1：50,000）［国土地理院「松阪」「伊勢」 1:50,000より］

できる。天花寺城跡では、複数の曲輪や土塁をもち、城域と重複するかたちで多数の中世墓も存在する。[15] また、近世に下るが、53基に及ぶ礫石経塚が確認されている。[16]

城館以外では集落跡が散在し、旧嬉野町内では、８遺跡が挙げられる。堀之内遺跡では区画溝を伴う建物や井戸で構成される二つの居住域が確認されている。[17] 区画溝は、中尾垣内遺跡（40）でも確認されており、その意義が考察されている。[18] 平生遺跡は井戸等が検出されており、[19] 木造赤坂遺跡[20]（41）、野田遺跡[21]（42）等でも集落の様相がわかる調査が実施されている。

またビハノ谷遺跡（43）では、小規模な掘立柱建物等が確認され、[22] 尾根上での生活があったようである。

（中川）

［註］

① 奥 義次・田村陽一・穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」『研究紀要２』三重県埋蔵文化財センター 平成5年3月

② 嬉野町教育委員会・嬉野町遺跡調査会『針箱遺跡・下之庄東方遺跡』1987.3

③ 森川幸雄ほか『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1995.3

④ 新田 洋「蛇亀橋遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1982.3

⑤ 川崎志乃ほか『筋違遺跡発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター 2004年3月

⑥ 和氣清章「下之庄東方遺跡」『三重県史資料編考古１』三重県 平成17年9月30日

⑦ 木野本和之『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター 2000.3

⑧ 和氣清章「筒野１号墳」『三重県史資料編考古１』三重県 平成17年9月30日

⑨ 辻 富美雄 『釜生田辻垣内窯跡群発掘調査概報』嬉野町教育委員会 1985.3

⑩ 伊勢野久好『片野遺跡Ⅳ』一志町教育委員会 2002.9
吉村利男ほか『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団 1976

⑪ 一志町役場『一志町史』昭和五十六年三月三十一日

⑫ 三重県教育委員会『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』1988.3

⑬ 吉村利男ほか『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団 1976

⑭ 竹田憲治ほか『嬉野史考古編』松阪市 平成18年3月24日

⑮ 原田恵理子ほか『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-１』三重県埋蔵文化財センター 2005年3月
木野本和之『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター 2000.3

⑯ 原田恵理子ほか『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-2』三重県埋蔵文化財センター 2002年3月

⑰ 河北秀実『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財調査報告第3分冊2』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991.3

⑱ 和氣清章『中尾垣内遺跡発掘調査報告』嬉野町教育委員会 1990年3月

⑲ 前掲⑬に同じ

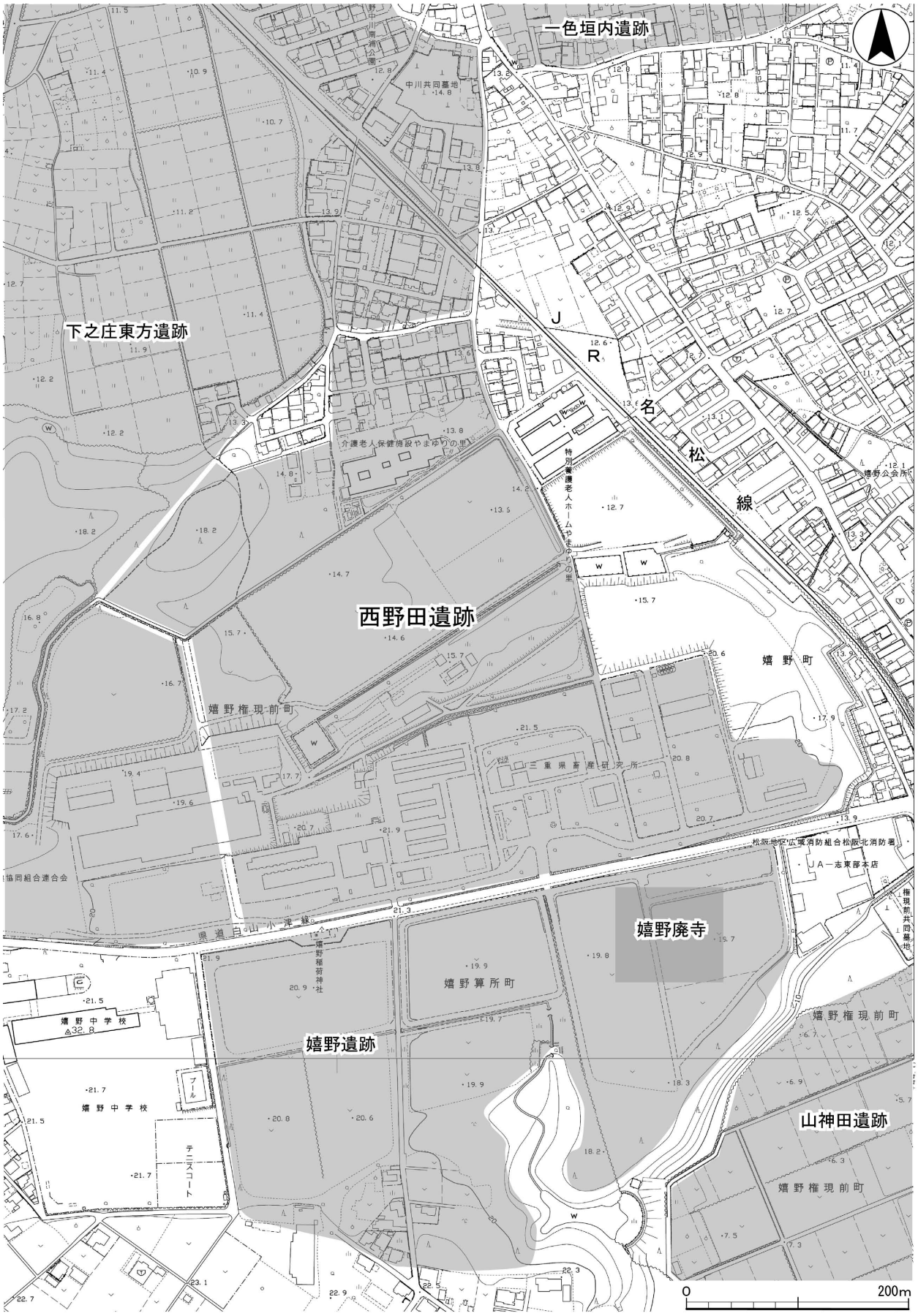
⑳ 水橋公恵ほか『一般国道23号中勢道路建設に伴う木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井出ノ上遺跡発掘調査報告《第2分冊》』三重県埋蔵文化財センター 2012年3月

㉑ 和氣清章『野田遺跡発掘調査報告書第三次』嬉野町教育委員会 2004年12月

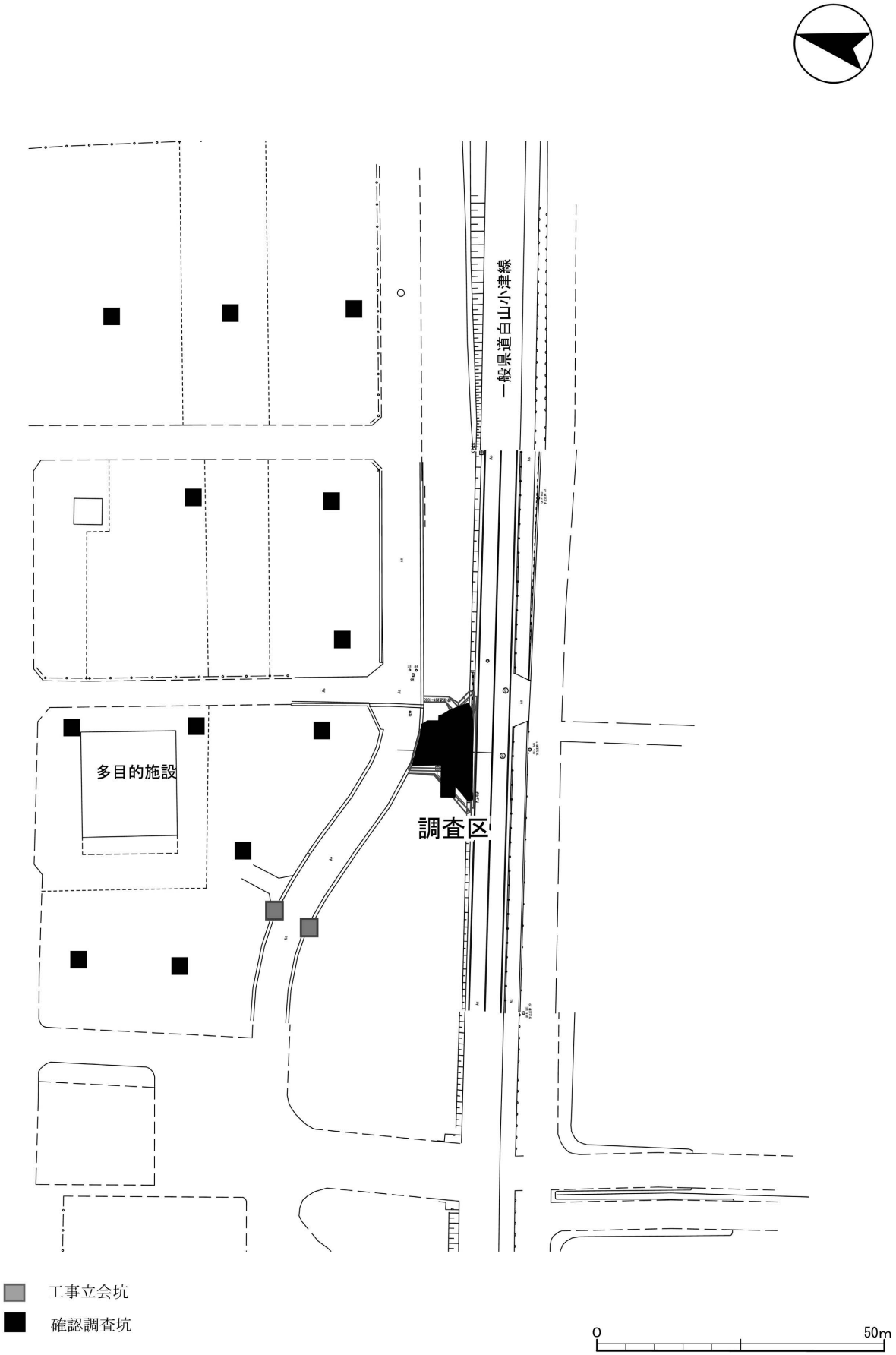
㉒ 小坂宣広ほか『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財調査報告第3分冊1』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991.3

［参考文献］

松阪市『嬉野史考古編』平成18年3月24日
三重県教育委員会『初瀬街道・伊勢本街道・和歌山街道』1982年3月31日



第２図　遺跡地形図（1：5,000）

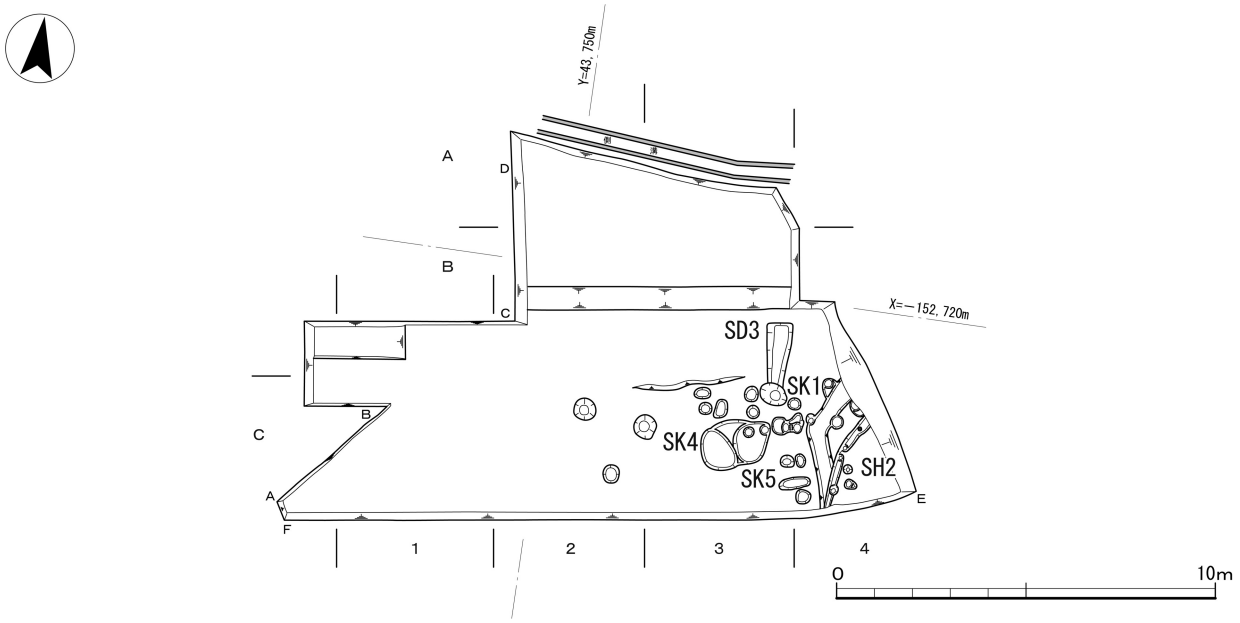


第３図　調査区位置図（1：1,000）

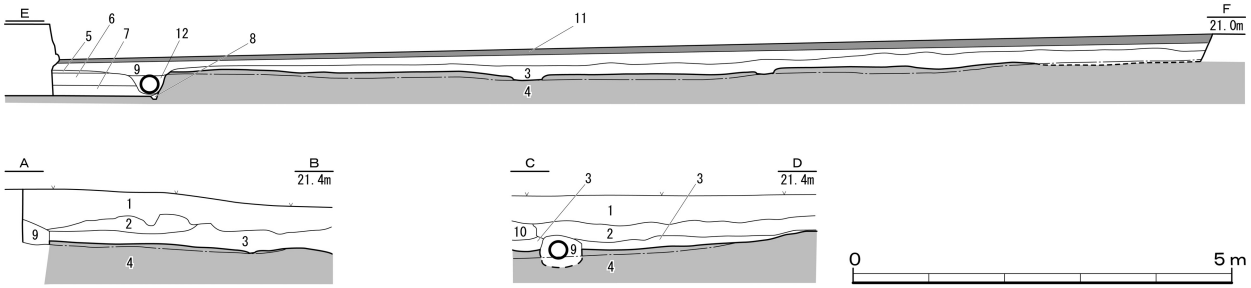
Ⅲ．遺　構

今回の調査で検出した遺構は、竪穴建物１棟、土坑３基、用途不明な遺構が１基、単独の小穴が10基で、いずれも調査区南東側での検出である。小穴については撹乱の可能性が否めない。

層序　調査区が研究所内のため、大規模な整地等が行われた可能性がある。表土は造成されたもので、植栽がある部分では、厚さ50cmに及ぶ。一方、舗装されている部分では、その下に厚さ10cm程度の砕石層がある。前述した両者の下に厚さ20cm程度の黒褐色細粒砂があり、これが本来の堆積層と考えられる。遺構検出は、この層の直下の黄褐色粘質土層上面で実施した。地表から検出面までの深さは、前者で70



第４図　調査区平面図（1：200）



1．10YR1.7/1 黒色土（極細粒砂含）＜表土＞
2．10YR5/4 にぶい黄褐色細流砂＜客土＞
3．10YR2/2 黒褐色土（細流砂を含む）
4．10YR5/2 黄褐色粘質土（極細粒砂を含む）＜検出面＞
5．7.5YR2/1 暗灰褐色土＜SH2埋土＞
6．7.5R2/2 極暗赤褐色土＜SH2埋土＞
7．7.5R3/3 暗赤褐色土＜SH2埋土＞
8．5YR4/8 にぶい赤褐色土＜SH2周溝埋土＞
9．砕石
10．木根
11．コンクリート
12．撹乱

第５図　調査区土層断面図（1：100）

～80cm、後者で40cm程度である。

ＳＫ１　長軸70cm、短軸50cmで、深さは検出面から35cmを測る平面規模に対して比較的深い土坑である。検出当初はＳＫ５と重複し、それに先行するものと思われたが、掘削を進めながら精査したところＳＫ５とは離れたものとなった。しかしＳＫ４を含め３基の土坑は、近隣の小穴を含め調査が錯誤した可能性を含む。

土坑底から土師器の皿や粗製椀の小片が出土したに止まる。

ＳＨ２　調査区南東隅で検出した竪穴建物である。検出時点では、複数棟の建物が重複するようにも見えたが、精査の結果、１棟の一部を検出したものとなった。おそらく方形の平面形を呈するもので、その西辺を検出したものと思われる。したがって、建物の規模は不明とせざるを得ない。ただし、若干弯曲しており、平面形を方形とするに疑問が残る。

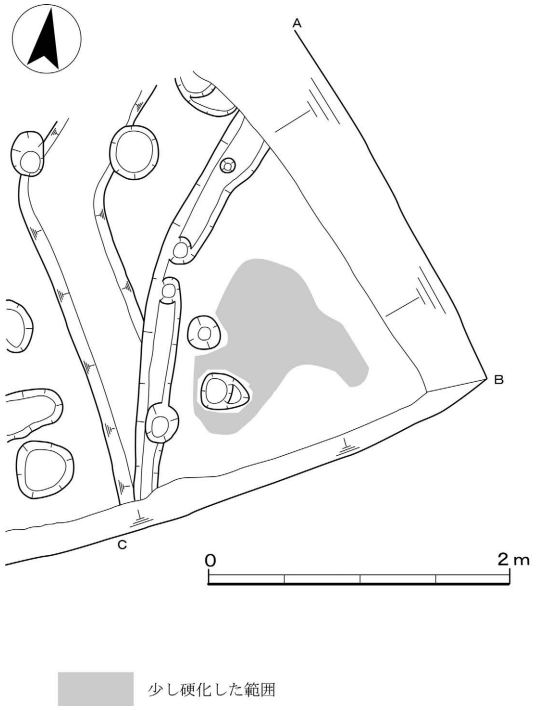
壁に沿って幅20cm、深さ10cm未満の浅い溝が断続的に延びており、周溝と考えられる。また、床面の一部が若干硬化している様子もみられた。須恵器の杯や土師器の杯・長胴甕が出土しているが、いずれも小片である。

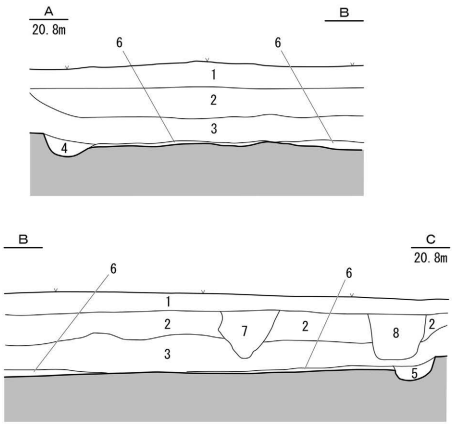
ＳＤ３　幅60cm、検出面からの深さ10cm程度の浅いもので、幅を減じながら1.6m南下しＳＫ１によって消滅している。しかし、ＳＫ１の南側に延びる様子はないため、長さ２m程度であったものと考えられる。土師器の甕のみが小片で出土している。

ＳＫ４　既述したように撹乱や遺構の重複が多く、検出に難航した。短編0.6m、長編1.2mの不整楕円形を呈し、深さは検出面から20cm程度の浅いものである。土師器の杯や粗製椀、長胴甕片が出土しているが、長胴甕が目立つ。

ＳＫ５　ＳＫ４に隣接し、同様な規模の土坑である。検出時点では、ＳＫ４を合わせた大型の土坑と思われたが、掘削の結果、別個のものとなった。須恵器の壺や甕、土師器の杯や皿が出土し、小片ではあるが、ＳＫ４より多様である。

ＳＺ６　調査区南東部の遺構が密集する部分で検出当初に認められた不定形な土坑状のものである。しかし、調査の進展とともに、多くの遺構に分かれたため、包含層が厚い部分と判断される。したがって、遺構とは認められない。　（中川・森川）





１．7.5R2/1 暗灰褐色土
２．7.5R2/2 極暗赤褐色土
３．7.5R3/3 暗赤褐色土
４．2.5YR4/6 赤褐色土（黄褐色土塊含）
５．5YR4/8 にぶい赤褐色土
６．5YR4/6 赤褐色土（やや粘性あり）＜貼床？＞
７．5YR2/1 黒褐色土（やや太い木根含）
８．撹乱

第６図　ＳＨ２実測図（1：50）

Ⅳ．遺　物

今回の調査で出土した遺物は、飛鳥～奈良時代の土師器や須恵器の杯・皿・壺・甕である。しかし、出土量は少量で小片であるため、器形の全様が分かるものは極めて少ない。

１．土師器

椀　図示できたものはＳＫ１出土の１のみである。粗製の椀であるが、器壁はやや薄い。図示できなかったが、ＳＫ４からも小片が出土しており、比較的厚い器壁である。

杯　ＳＫ４出土の２とＳＫ５の３を図示した。両者の口縁部は、同様の形状を呈する。若干外反気味の口縁端部を上に摘まみ上げるもので、端部外面に沈線を施している。３は法量が明らかな唯一のもので、底部外面をヘラケズリで調整している。２もおそらく同様であるものと推測される。

２の口縁部内面には焼成前に記された記号がある。ヘラにより刻まれたもので「×」を表すものと思われるが、刻みが浅く記号としては不完全である。単なる工具痕の可能性も残る。

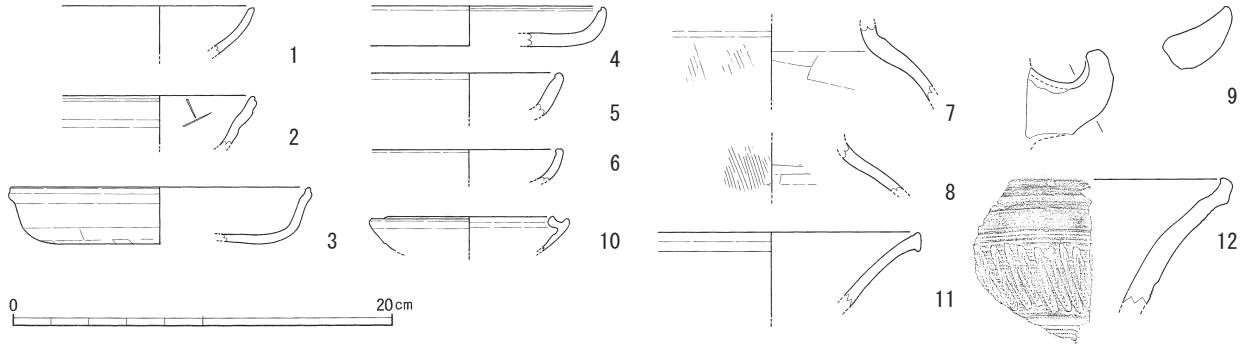
皿　ＳＺ６出土の４、ＳＫ５の５、ＳＫ１の６を図示した。いずれも内弯気味の口縁部で、４は端部内面に沈線を巡らせ、５・６は若干内に肥厚させている。４の底部外面は不明確ながらヘラケズリで調整されるものと観察される。

甕・甑　ＳＫ１出土の７、ＳＤ３の８、ＳＨ２の９を図示した。７・８は頸部の小片であるが、内面のハケメは浅く、工具ナデとなっている。

２．須恵器

10は蓋の可能性もあるが、受部が厚くしっかりしているので、杯としておく。いずれにしても口径が縮小したものである。

11・12は甕の口縁部片であるが、11は壺の可能性もある。12は波状文で装飾されるが、沈線や突帯は明確ではなく、施文前にカキメが施される。（森川）



第７図　出土遺物（1：4）

番号	実測番号	出土位置	遺構	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
1	1-2	C3	SK1	土師器 椀	—	—	—	外面未調整	にぶい橙7.5YR7/4	やや密	小片	粗製椀。摩滅により調整不明確。
2	1-4	C3	SK4	土師器 杯	—	—	—	—	橙5YR7/6	やや密	小片	口縁部内面にヘラ記号。
3	1-5	C3	SK5	土師器 杯	15.8	3.0	—	底部外面ヘラケズリ	橙5YR7/8	やや密	口縁部1/12	
4	2-2	C4	SZ6	土師器 皿	—	2.1	—	底部外面ヘラケズリ	浅黄橙7.5YR8/6	やや密	小片	摩滅により調整不明確。
5	1-6	C3	SK5	土師器 皿	—	—	—	—	橙2.5YR7/8	やや密	小片	
6	1-1	C3	SK1	土師器 皿	—	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	やや密	小片	
7	1-3	C3	SK1	土師器 甕	—	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや密	小片	摩滅により調整不明確。
8	2-1	C4	SD3	土師器 甕	—	—	—	外面ハケメ、内面工具ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	やや密	小片	摩滅により調整不明確。
9	1-9	C4	SH2	土師器 甑	—	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/4	やや密	把手完存	
10	1-8	C4	SH2	須恵器 杯	8.8	—	受部径10.6	ロクロナデ	灰N6/	精良	口縁部1/12	
11	1-7	C3	SK5	須恵器 甕	—	—	—	—	灰白N7/	精良	小片	
12	2-3	C4	SZ6	須恵器 甕	—	—	—	—	褐灰10YR6/1	精良	小片	口縁部外面に波状文。

第１表　遺物観察表

Ⅴ．結　語

１．遺構の時期

今回の調査で出土した遺物で、唯一全体の器形が明確なものがＳＫ５出土の土師器杯（３）である。口縁部形態はⅡ－１期の特徴が表れているが、底部はヘラケズリで調整している。これらから、Ⅱ－１期の古相[①]とすることができる。共伴する土師器皿（５）の口縁形態はやや古相を示し、Ⅰ期に収まるものである。他の遺物も小片ではあるが前記を否定するものは無い。したがって、ＳＫ５の時期をⅠ－３期からⅡ－１期への過渡期として奈良時代末の８世紀末頃としておきたい。他にＳＫ１、ＳＫ４も同様な土師器の杯皿類の小片が出土しており、同様な時期としておく。

次に唯一の竪穴建物であるＳＨ２出土の須恵器杯（10）は口径が10㎝未満に縮小しており、杯であるか蓋であるかにかかわらず陶邑の編年ではⅡ型式６段階からⅢ型式１段階[②]とすることができ、７世紀に遡る。図示出来なかったが、共伴する土師器には杯皿類の小片がみられる。斎宮での土師器杯皿類の出現は７世紀後半とされ[③]、平生遺跡出土のものは７世紀末から８世紀初頭とされている[④]。このため、10を混入として、他の遺構と同様に８世紀末まで引き下げることも可能である。しかし、小穴等の出土遺物には頸部が肥厚する古相の土師器甕も出土しており、７世紀に遡る時期の遺構が近辺に存在することを暗示している。ここでは、疑問を含むものの５次調査で検出された集落と同時期の７世紀後半[⑤]としておきたい。

以上、今回の調査では７世紀後半の竪穴建物１棟と８世紀末の土坑３基を検出したことになる。なお、ＳＤ３については時期決定の根拠を持たないが、ＳＫ１との前後関係から奈良時代に収まるものと考えられ、出土した土師器甕小片もこれを否定するものではない。

２．嬉野廃寺との関係

西野田遺跡では、これまでに５回の本格的な発掘調査が行われてきたが、近隣の調査区でも100ｍほど離れており、遺構の直接的な関係は生じない。ただし、散財的な集落であった[⑥]ようなので、今回の調査で検出したＳＨ２も構成要素の一つとすることもできる。

一方、嬉野廃寺との関係は５次調査でも検討されているが、直接の関係は認められない[⑦]としている。今回の調査区は西野田遺跡でも最も嬉野廃寺に近い位置にある。松阪市教育委員会によれば、嬉野廃寺は白鳳時代とされ、竪穴建物ＳＨ２の時期と合致する。時期は下るが、国分寺の研究では主要伽藍が占地する「伽藍地」の他に寺院運営施設が占地する「付属院地」があり、上総国分寺では伽藍地の北方に掘立柱建物と竪穴建物で構成される付属院地が確認されている[⑧]。竪穴建物ＳＨ２が嬉野廃寺の北側に位置することもあり、寺院運営施設の一部の可能性が生じる。そうした場合、８世紀末に下るＳＫ５等の土坑の存在は、それまで嬉野廃寺が存続していた可能性を示し、それ以降の遺物が出土していないことは、この頃に嬉野廃寺が廃絶したことを示すことになる。しかしながら、嬉野廃寺の実態が不明確な現状では、推測の域を出ない。今回の調査結果の評価は、嬉野廃寺の解明を待って行われるべきものである。　（森川）

［註］

① 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』2019年3月

② 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年11月25日

③ 前掲①に同じ

④ 吉村利男ほか『平生遺跡発掘調査報告』平生遺跡調査団　1976

⑤ 石井智大ほか『西野田遺跡発掘調査報告 （第１・２・３次調査）』　三重県埋蔵文化財センター 2009年3月

⑥ 前掲⑤に同じ。

⑦ 前掲⑤に同じ。

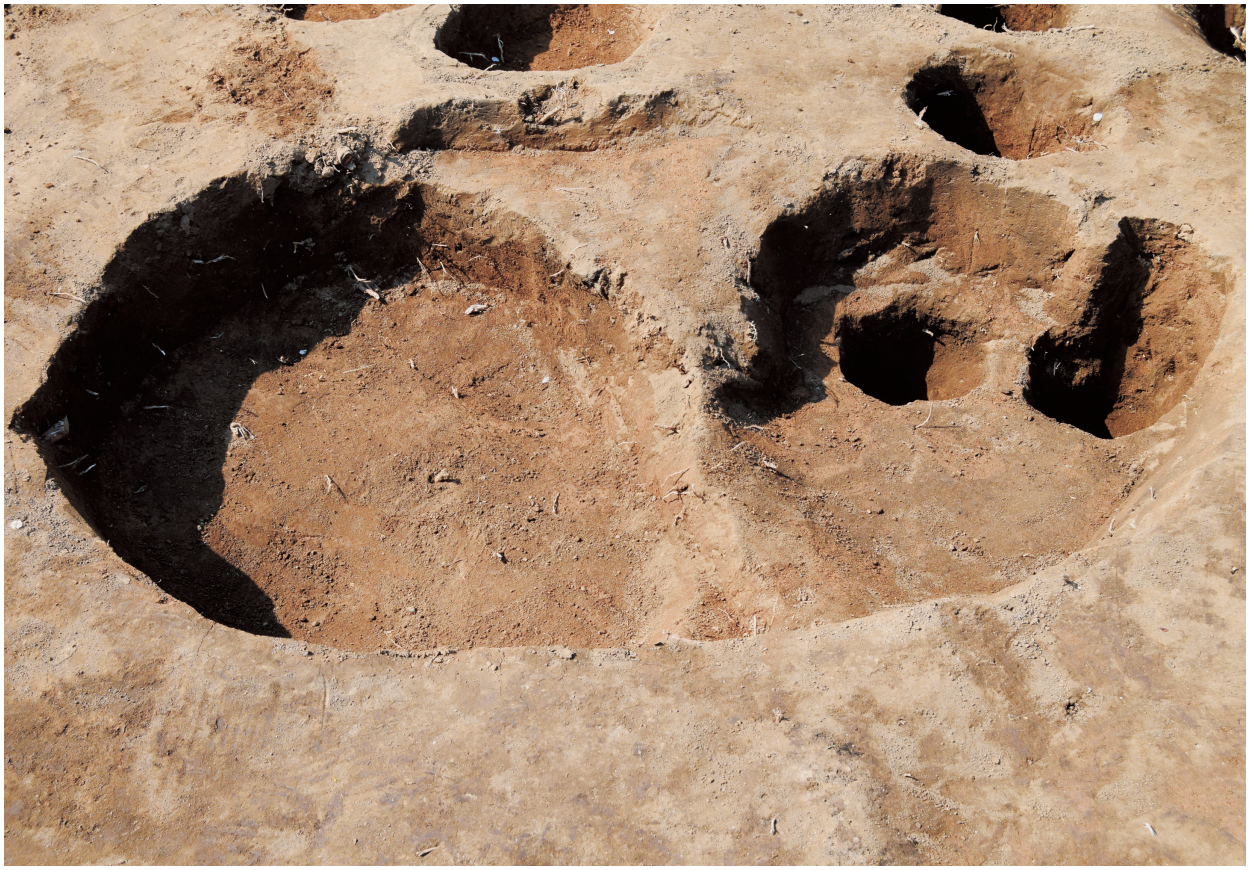
⑧ 須田 勉「国分寺創建の諸問題」『関東の国分寺』関東古瓦研究会　1994年11月26・27日

調査前風景（北東から）

調査区から嬉野廃寺を望む（北西から）

写真図版２

調査区全景（北東から）

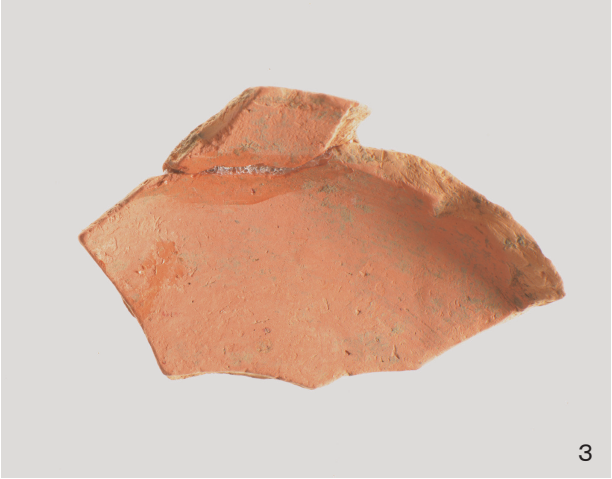


ＳＫ４・ＳＫ５（南から）

ＳＨ２（北東から）

ＳＨ２（西から）

写真図版４



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	にしのだいせき（だいろくじ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	西野田遺跡（第６次）発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	４０５
編 著 者 名	中川 明　森川常厚
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発 行 年 月 日	2022(令和４)年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしのだいせき 西野田遺跡	まつさかし 松阪市 うれしのなかがわちょう 嬉野中川町	24204	b 249	34度 37分 17秒	136度 28分 38秒	20200406 ～ 20200410	115㎡	畜産研究所 施設整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西野田遺跡	散布地	飛鳥 奈良	竪穴建物 土坑	須恵器 土師器	

要 約	西野田遺跡は、嬉野町の南東部の台地に立地し、標高は20ｍ前後である。今回の調査区は遺跡南東端部にあたり奈良時代前後の遺構遺物を確認した。主な遺構は７世紀後半の竪穴建物と８世紀末の土坑である。近隣の嬉野廃寺との関係が懸念される。

三重県埋蔵文化財調査報告４０５

西野田遺跡（第６次）
発掘調査報告

２０２２(令和４)年３月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　共立印刷株式会社